

野生動物をもとめて

テレビ取材班とともに

実吉達郎



DAINIPPON
JUNIOR BOOKS
nonfiction

大日本ジュニア・ブックス〈ノンフィクション〉

野生動物をもとめて——テレビ取材班と
ともに

著者 さねよし たつ お
実吉達郎

発行者 佐久間裕三

発行所 大日本図書株式会社

104 東京都中央区銀座 1—9—10

電話 (03) 561—8671~9

振替 東京 219 番

印刷所 株式会社 金羊社

製本所 株式会社 宮田製本所



8345—217609—4398

NDC 482

さねよし たつ お
実吉達郎

1974年 3月10日 第1刷発行 ©

1975年 6月30日 第2刷発行

大日本図書 昭和49 (1974)
159P. 22cm (大日本ジュ
ニア・ブックス〈ノンフィ
クション〉)

著者略歴

1929年11月、広島県呉市に、父の赴任中その官舎で生まれる。1949年東京農大卒業。三里塚牧場、野毛山動物園に勤務、のちブラジルに渡り、7年間動物研究。1962年、帰国後、動物ライターとして今日に到る。児童向け著書に、「世界の動物生態記」(日本教文社)「クルングの冒険」(太平出版社)「大水河は去った」(国土社)「地球さいごの怪物」(偕成社)などがある。動物文学会々員。

現住所：東京都町田市成瀬3068—5

もし乱丁・落丁の本がお手もとに届きましたら、お手数でもご返送ください。取り替えさせていただきます。

野生動物をもとめて

テレビ取材班とともに

実吉達郎

DAINIPPON
JUNIOR BOOKS
nonfiction



まえがき

テレビの動物ドキュメンタリー・シリーズの一つ「ナブ号の世界動物探險」^{たんけん}という番組を見たことがありますか？ いつも、めずらしい、あるいは美しい、あるいはおもしろい動物を主人公^{しゅじんこう}にして、その動物のいるところへ、ひとりの〈隊長〉^{たいちょう}にひきいられた〈探險隊〉^{たんけんたい}が出かけてゆくという番組です。

ナブ号とは船の名か、自動車の名なのか、これは、そのテレビ番組をつくっている会社の、英語の頭文字、N・A・Vをナブと読みくだして、つけた名です。その番組によって、船にも車にもなり、ときには飛行機^{ひこうき}やヘリコプターの名にもなるのです。そのマークのついた乗りものが、その番組にかならず登場するのです。

わたしはその〈探險隊〉^{たんけんたい}の〈隊長〉^{たいちょう}のひとりで、今までいくつかの国ぐにを旅行し、それぞれの動物を撮影^{さつえい}するとき、知識^{ちしき}を提供^{ていきょう}し、出演^{しゅつえん}してきました。厚い防寒服^{ぼうふく}を着^きていても、ふるえるほど寒い雪の国。うっかり肌^{はだ}をさらしていると、日やけどどころか、まっかにヤケドしてしまう暑さ^{あつ}の熱帯^{ねつたい}。それらの国ぐに行^いっては、それぞれ特有^{とくゆう}な動物を觀察^{かんさつ}し、研究^{けんきゅう}してくわしく記録^{きろく}してきました。

この本は、そういった国ぐにのうち、カナダと、インドネシアのコモド島

と、コロンビアと——この三つをえらんで、したこと、見たこと、考えたことを、ありのままに書いたものです。

それぞれテーマとなっている動物たち——オオカミ、コヨーテ、コモドオオトカゲ、フラミンゴ、ペリカンなどの生態、そしてわたしたちの知ったこと、出あったことは、あまりにおもしろく、よい経験だったので、ただ、出あった人にお話ししているだけでは、ものたりなくて、おしくてしかたがありません。そこで、わたしはその記録を、もっともっと多くの人にお話しして、聞いてほしいと思い、このノンフィクションを書いたのです。

ほんとうにあったことを、ありのまま、それをやった人の口から聞く、読む——ということ、ほんとうのお話、それを愛する人には、かならずおもしろいと思います。また、そういう遠い国の大自然の中へ行ってみたいと思う人は、さあ、これから、わたしといっしょに行きましょう。わたしは、きっと、その人が、その自然の中へ、ほんとうに行つたのと同じ気持ちになれると思います。

野生動物をもとめて

■テレビ取材班とともに

もくじ

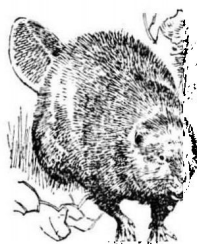
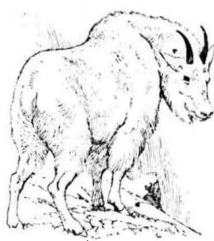


野生動物をもとめて ■テレビ取材班とともに

まえがき・4

カナダのオオカミ・9

コモド島のオオトカゲ・67



コロンビアのフラミンゴ・

119

装幀・カット

図版

写真提供

田中豊美

井上愛子

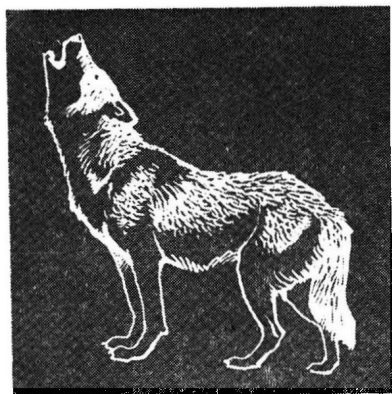
山口征男

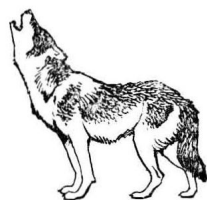
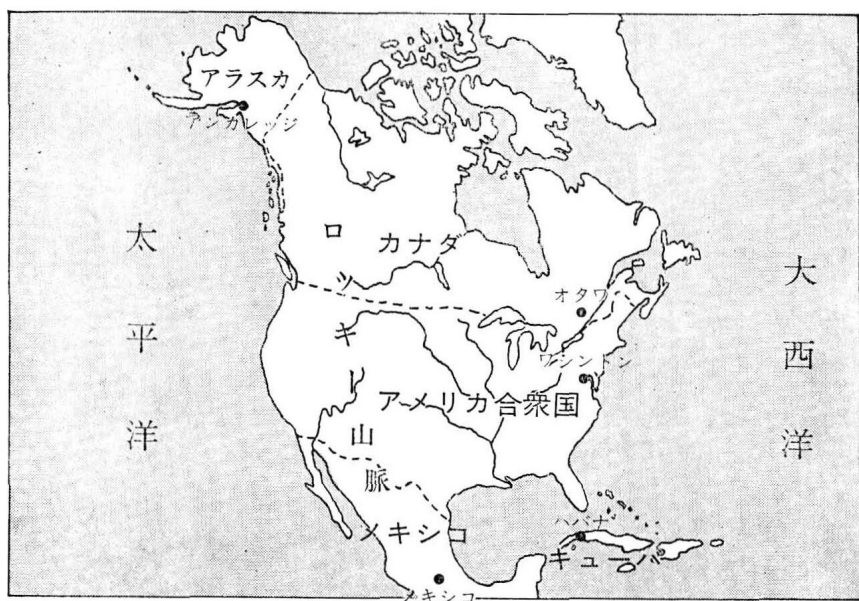
実吉達郎

日本映像記録

センター

カナダのオオカミ





三月八日、朝六時半、アルバータ州アルバータ州の首府
エドモントンにあるバス・ターミナルを出発
したグレイハウンド・バスは、ジャスパー・
ナショナル・パークにむかつて、すさまじい
ほどの速力そくりよくで走っていた。

ロッキーマウンテンロッキーマウンテン越えバンクーバー行きちやうちきよりの長距離バ
スなので、とちゅうはジャスパー自然公園しぜんこうえんの
中心にある小さな町にしか止まらない。トラ
ックにも、キャンピング・カーにも、ジープ
にも、決して自分からはよけようと思わないバ
スは、乗り物の中の王であるかのように、ア

スペイン（白楊）の枯れ林や、樹氷の美しくきらめくヤブ地や、牧場地帯の中を、ほとんどまっすぐにすらぬくハイウェイを走りつづける。雪のはげしい照りかえしを防ぐため、青いひさしのついている窓の外は、ところどころ雪のない田んぼのように見えるところがあった。まれに見える池や湖水は、みな白く凍っている。家は、ところどころの村をべつにすれば、近くても数百メートルは、はなれている。朝が早いせいもあるが、わたしはバンクーバーからこの国、カナダへはいつてきたとき、旅客機の上から見て、いやになるほどさびしく、単調な、半分雪におおわれた大陸の内部——という印象を受けたのを思いだした。

そして、この大平野はどこまでもどこまでも、まったくいらに、なんと国境を越えて、アメリカ合衆国のワイオミング州までつづいているのだ。

九時半ごろ、やっと、山間部へかかりはじめ、地平線のむこうに見えはじめた山やまのいただきが近づいた。そのふもとにある、エドソンという村に停車し、わたしたちはほかのお客やバスの運転手たちとともに、セルフ・サービスの食堂で食事をする。わたしはたくさんならんでいる食物の中から、サンドイッチ、フルーツパイ、湯気の立つチョコレート、アップルジュースとドーナッツをとった。

わたしたちというのは、ディレクターのYさん、カメラマンのAさん、通訳のK君、それにわたしの四人だ。わたしたちは現在の地球上で、シベリアとアラスカとカナダにしか、もう生き残

っていないといわれる、野生のオオカミのドキュメンタリー・テレビ番組をつくるために来たのだ。大型バスの横っ腹からつまこまれて、バスの底の部分には、わたしたちの撮影器具が、ぎっしりはいつている。

ふたたび出発したバスが、山やまのあいだにはいったのは十時ごろであった。

いつしかハイウェイそのものが高くなり、山やまの半分は低く見え、やがてそれも見えなくなった。ちかぢかとせまるアルプス型の山のつらなりが、右にも左にもわたしたちの視界をくぎる。大ロッキーマウンテンの中へ、わたしたちは突入したのだ。

わたしはまた、バンクーバーからエドモントンへ来るとき、上空から見たロッキーマウンテンの山脈の壮観を思いだした。

数千メートルの上空を飛ぶセブン・トゥ・セブン型旅客機の上からは、雲の海の切れまにだけ、雪溪か、凍湖のようなものが見えた。山のところどころに、村なのだろうか、直線やかかったような部分が見える。ミニ・スカートのエア・ホステスが紙コップですすめてくれる熱いコーヒーを飲むうちに、機はブリティッシュ・コロンビア州を翔りすぎる。いつのまにか山やまはまた雲海におおわれ、何も見えなくなる。かと思うと、またぬっとマッターホルンのようにとがった山のいただきを、その上にあらわしたりする。

雲はまだらに、水平になり、その雲海の上に点々とうかぶ氷島のように山やまがつづく。それ



旅客機の上から見る大ロッキー山脈

を縫い、それをすかして、三分の二ほどの残雪をいただいた連山……ロッキーは縦にひとつながりの山でなく、むしろ無数の山の原であった。

針葉樹の森が見え、ときどき雪の上につきだしたり、その上にくらい影を落としている。山の上、谷あいだけに、雪が放射状に残っている。右前方はもうアメリカ合衆国だ。つまりここはロッキーの南端にあたる。

雪が横縞になっているのがロッキーの特徴だときいていたが、そればかりではない。あるいは網の目のように、あるいはキノコの菌糸のように、残雪は山の海をおおっている。その量感の上から見おろしてさえ圧倒的で、もしあの山の中のひとつに登ったら、という気もおこらない。まさしく北アメリカ大



バイソン

陸の背骨である。

十時三十八分、「ジャスパー・ナショナル・パーク」と書いた門を、大型バスはくぐりぬけて、なおもビュンビュンかわいたひびきを立てながら走りつづけた。

左右は半ば雪におおわれた山やまでである。上空から見た絶景を、いまわたしはその山やまと同じ地上に立って見ている。浅く

広い雪どけ水を、ゆっくりゆっくり流し出す川。雪原と見えるものはまっ白く凍った上に、雪がつもっている凍湖。

ここから先が目的地、アルバータ州ではいちばん広大な自然公園ジャスパーなのだ。上空から見た山やま、いま地上から見ている四方の山容、そのまわりに、わたしたちが撮影しようとしているオオカミは、いるはずなのだ。しかし――

わたしはここへ来るまえにエドモントンの町のモーターで、自分のおぼえている北アメリカ（もちろん、その中にはカナダもはいっている）のオオカミやコヨーテについて思いだし、トランクに入れて日本から持ってきた本や資料をしらべたり、いまアメリカ合衆国のイリノイ州の大学にいる弟に電話を入れて、カナダにいたころオオカミについてしらべたことはないかと問い合わせ



カリブー（トナカイ）

せたりした。

そのあげく、わたしはメモ帳に、つぎのようにまとめてみた。

かつて、この大陸でオオカミは、もっとも広い分布を示していた。アルバータ州からアメリカ合衆国を越えて、南メキシコの国境近くまで三八五〇キロメートル、アメリカ東部インディアナ州からロッキーマン脈まで一六〇〇キロメートルにわたって、この大陸はオオカミ王国だった。それが一七〇〇年代から、この国の開拓時代とともに、オオカミと人のたたかいというよりも、人間のオオカミ征伐がはじまった。毛皮だけでも一七四三年ごろ、ハドソン湾会社で一八五〇万枚のオオカミの毛皮が売られている。人間は一方において、北アメリカの大地をおおうほどの「といわれたあの巨大なアメリカ野生牛、バイソンを殺して殺して殺しまくった。その死体を

食ってオオカミとコヨーテがふえた。そのオオカミ、コヨーテが家畜を害するというので、政府はオオカミを全滅させる方針をたてた。

こうして一九一四年から二四年までのあいだに、オオカミはほとんどいなくなってしまった。コヨーテも一年に九万頭ずつも殺されている。かがやかしい西部大平原の王者の一生をえがいたアーネスト・T・シートンの名作『カランボーのオオカミ王ロボー』